

Stories

「あらゆる存在は支え合っている」エルネスト・ネットが新作展で語る生命と関係性

戦争や分断が続く時代に、私たちは他者や自然とどのような関係を築いていけるのか。ブラジルを代表する現代アーティスト、エルネスト・ネットは、現在開催中の個展『Dreaming Beings (夢見る存在たち)』でその問いに向き合う。昆虫や生命体を思わせる新作彫刻群を通して浮かび上がるのは、「共生」という普遍的なテーマだ。

By 中島良平
2026年6月10日



東京・六本木の小山登美夫ギャラリーで個展『Dreaming Beings (夢見る存在たち)』が開催中のエルネスト・ネット。ブラジルを代表するアーティストのひとりであり、国際的に活躍を続ける彼にインタビューを行った。

個展会場に並ぶのは、かぎ針編みの網と紐、竹串を組み合わせた新作シリーズ「SymbioZooEthicalBeings—SZEBS」。壁や天井に TENT を張るようなテンションを保って設置することにより、空間に繊細なドローイングを描き出したかの印象を与える。ストックキングに発泡スチロールの玉やスライスを入れたソフト・スカルプチュアを1980年代より発表し、体験型のインスタレーションへと展開してきた彼による、彫刻ともインスタレーションとも呼べる新たな地平に位置付けられる作品だと言えるだろう。



展示風景

「私の作品はすべて、自然とその関係にまつわるものです」と、作品が並ぶ空間でシリーズのタイトルについて話し始めるエルネスト・ネット。「ここに並んでいる昆虫のように見える作品は、『SZEBS』というシリーズなのだが、生命や自然の関係についてリサーチをして、単語の組み合わせから音楽的なものが生まれてきてタイトルになった。(共生を意味する "symbiosis" の接頭辞である) "symbio-" が意味するのは、この世界にある存在はすべて共生しているということ」と、説明の途中からネットはリズムカルに歌い始める。



竹のスティックを内側から摩擦させることで、動物の鳴き声のような音を出すブラジルの楽器「クワイーカ」。サンバのレッスンには今も通っており、「リズムとダンスは自分にとって常に重要な要素だ」と話す。

「sym, sym, sym」 symbio-zoo, sym, sym, sym」 symbio-zoo, zoo, zoo, zoo」 ethical-being」 zoo, zoo, zoo」 ethical-being」 こうしてスーッと息を吸って吐くと、地球の空気が自分に取り込まれる。君が呼吸をすれば、君にも空気が取り込まれる。そして吐き出される。この空間にいるみんなが呼吸を交換している。そして "zoo" は、ラテン語で動物を表す言葉。ここにあるかぎ針で編み上げた作品も、ドローイングも、動物とすぐ関わっている。その動物たちは人間以上に倫理的な (ethical) 存在だと思っている。

現在はヒューマニティが危機にさらされている時代でもある。非常に悲しい時代であり、愚かだとも思う。戦争が続く、虐殺が起こっている。動物は食べるために他の動物を殺すかもしれないが、必要以上に殺しはしないでしょう？ あらゆる存在が関係を持っているこの世界で、生と死が繰り返されていることの尊さを私たち人間も分かち合えないものだろうか」

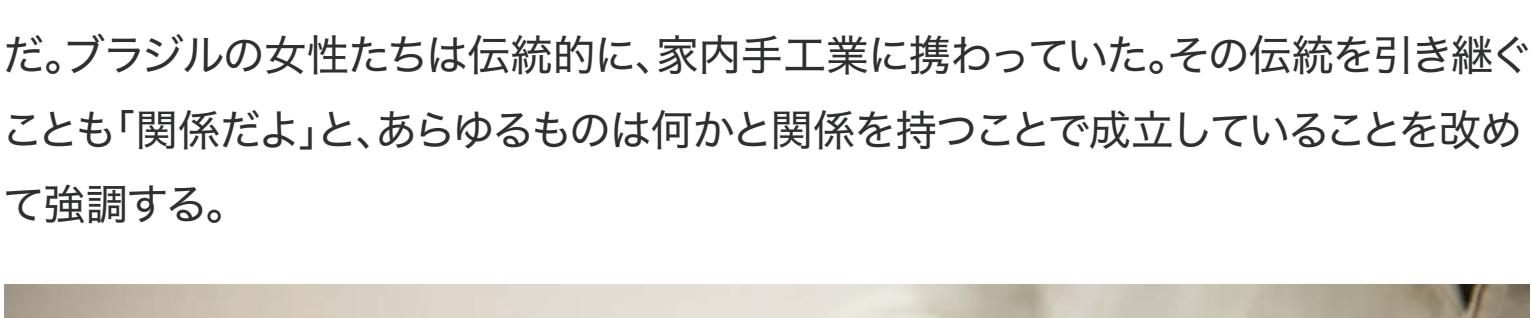
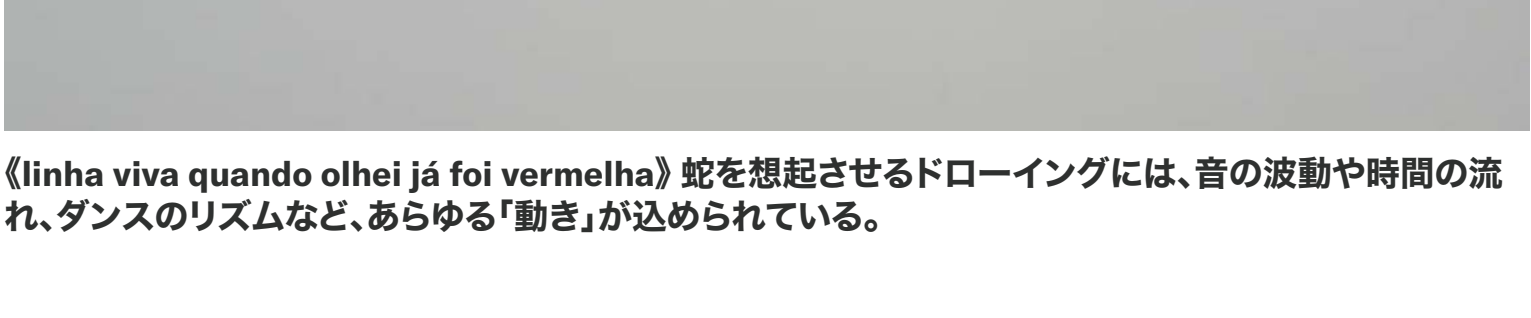


左より、《szeb-insepapaté 13》2026、《we flow joy dance we flow》2024 紐と竹串による彫刻と、泥で描いたドローイングで展示を構成。「ドローイングは彫刻の影のようなもの」だとネットは話す。



《linha viva quando olhei já foi vermelha》蛇を想起させるドローイングには、音の波動や時間の流れ、ダンスのリズムなど、あらゆる「動き」が込められている。

「4つのステッチで止められた輪を作り、それが二重に重なり、次のリングへとつながっていく」という、螺旋状に広がっていくかぎ針で網を作る技術をネットは大叔母から学んだ。ブラジルの女性たちは伝統的に、家内手工業に携わっていた。その伝統を引き継ぐことも「関係だよ」と、あらゆるものは何かと関係を持つことで成立していることを改めて強調する。



《We cell dance》2024 大叔母から教わったという、かぎ針で網を紡ぎ上げる技法を実演して説明してくれた。

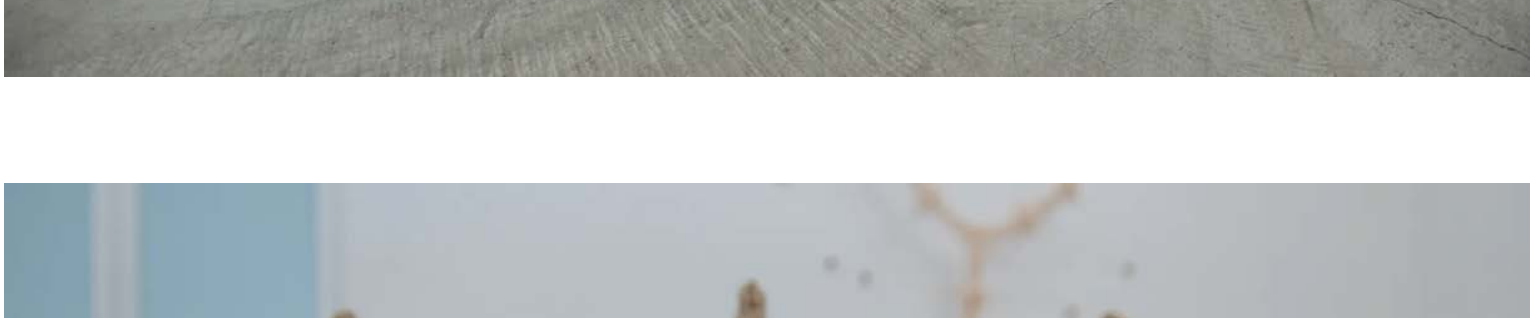
「幼い頃に祖母の家に行くとき、磁器に絵付けをしている人たちがいたり、かぎ針で糸を紡いでクロスを作っている人がいたり、キッチンで食事を作っている人がいたりして、みんなが共通の時間を過ごしていた。その光景はすごくよく覚えているし、そうしてそれぞれが何かを作りながら互いを支え合うことが、どれだけ重要かということを幼い頃に学びました」



《Ritual dance》2026 重しでテンションがかかった網の中央には、豊穡の印として米粒が吊るされている。

ネットが共生や関係ということを大事だと考え続けている原点に、祖母の家で見た光景があるのだろう。ネットは大叔母から引き継いだ技術により、かぎ針で編み上げた網状の紐と、それを竹串に突っ張らせ、テンションによって成立させる「彫刻」を完成させた。紐で生み出された網の輪は、隣の輪と引き合ってテンションを生み、竹串もまた固定されることなく、紐とのテンションによって互いを立体的に成り立たせている。ここにも関係による成立が生み出されており、あらゆる個は個だけで存在するのではなく、さまざまなものやことと関係を持ち、支え、支えられることで存在しているのだということを、展示全体を通して伝えている。エネルギーが流れ、時間が移ろい、生と死が繰り返されることで世界は継続していくのだと。

「アートギャラリーの壁にアート作品が展示されていると、冷たい印象に感じることもあるでしょう。それを変えたいと思い、壁のことをすごく意識した。作品タイトルの "insepa" というのは、英語で虫を意味する "insect" と、ポルトガル語で壁を意味する "parede" の頭を組み合わせたものだ。虫が壁を這っていくように作品が展示されれば、そのエネルギーや、森の中のスピリットのような存在も感じられるのではないかと考えたんだ」



《szeb-insepa 18》2026 18の細胞の連なりをタイトルの数字で表した。

エルネスト・ネットは1980年代にソフト・スカルプチュアで注目されたが冒頭で記したが、現在まで、空間表現や鑑賞者による体験を作品に組み込みながら、彫刻の領域を拡張してきたアーティストと言えるだろう。では、ネットは彫刻をどのようなものとして捉え、その領域を広げてきたのだろうか。

「彫刻の表現は自分にとって変わり続けているが、彫刻の核は変わっていない。あらゆるものが彫刻になりうると思う。例えば、君が私にインタビューしているこの状況。テーブルがあって、編集者と君と私がいる、君の後ろにカメラの三脚があって、壁にはドローイングが掛けられている。その状況がそのまま物質として存在して、役割や機能を持たずに物質として存在が成立していたら、それは彫刻だと呼べるだろう」

紐と竹串で成立する、愛らしさも感じさせる彫刻作品に、あらゆるものは何かと関係を持たずには存在し得ないという真理を込めるエルネスト・ネット。会場で作品から彼のヴァイブレーションを受け止め、自分の中で生じる新たな鼓動を感じてほしい。それこそが、ネットの強調する「関係」の現れだと言えるはずだから。



エルネスト・ネット
PROFILE

1964年ブラジル・リオデジャネイロ生まれ。1980年代後半より、伸縮性のある布やスライス、自然素材を用いた有機的な彫刻やインスタレーションで注目を集める。2001年の第49回ヴェネチア・ビエンナーレのブラジル館代表選出をはじめ、これまで数々の国際的な展示や世界各国の美術館で作品を発表。それら作品は、ポンピドゥー・センター（パリ）、グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、ニューヨーク近代美術館（ニューヨーク）、テート美術館（ロンドン）など主要都市の美術館に収蔵されている。

「Dreaming Beings (夢見る存在たち)」
会期：2026年5月2日(土) - 6月13日(土)
時間：11:00-19:00
入場料：無料
休館日：日・月・祝日
会場：小山登美夫ギャラリー六本木(港区六本木6-5-24 complex665 2F)
<https://www.tomioyamagallery.com/exhibitions/neto-2026/>

文と写真・中島良平

編集・倉田佳子 (GQ)